



Data 2025-109
監督・脚本：パトリシオ・グスマン

👁️👁️ みどころ

『最初の年』とは一体ナニ？キリスト教徒にとってのそれはイエス・キリストが誕生した年（＝紀元元年）だが、チリ人民にとってのそれは、アジェンデ社会主義政権が世界初の民主的選挙によって誕生した1970年だ。

アジェンデ支持派だった、当時34歳のパトリシオ・グスマン監督は、3人のチームでその平和的な革命遂行の姿とそれに熱狂するチリ人民の姿をカメラに収めたが、反動勢力の抵抗は？そして2年後の姿は・・・？

1789年のフランス革命とその反動の歴史は明らかだが、チリの「最初の年」の高揚ぶりは55年を経た今でも、本作を見ればふつつつと伝わってくるので、それに注目！しかし、その後の悲しき結末は？

1970年の大阪万博は2025年に2度目の関西万博が開催された今、熱く語られたが、奇跡的に復元したフィルムによって『最初の年』が公開された2025年の今、あらためて1970年に誕生したチリのアジェンデ政権についてしっかり語り合いたい。

■□■本作は何の映画？『最初の年』とは1970年！それはなぜ？■□■

本作の邦題は、『最初の年（2Kレストア版）』、そして原題は『El primer año』だが、これは一体何語？本作は何の映画？そして、「最初の年」とは一体ナニ？「最初の年」というタイトルだけでは、本作が何の映画かさっぱりわからないが、邦題のサブタイトル『民意が生んだ、社会主義アジェンデ政権』を読めば、なるほど、なるほど。『El primer año』はチリ語らしい。そして、本作の邦題とされている「最初の年」とは1970年だが、それは、南米の西側に位置する、ベトナムと同じように極端に南北に細長い国であるチリで、民主的選挙によって初めて社会主義を掲げたアジェンデ大統領が選ばれ、アジェンデ社会主義

政権が誕生した「最初の年」という意味だ。

秦の始皇帝が誕生したのは紀元前 221 年、ローマでシーザーが死んだのは紀元前 44 年だが、キリスト教の西暦で紀元前と紀元後を分ける「最初の年」とは、イエス・キリストが生まれた年のことだ。しかし、いわゆる大航海時代にスペインの植民地とされ、国内の資源をすべてスペインに収奪されていたチリの人たち（人民）にとっての「最初の年」は、世界で初めて民主的な選挙によってアジェンダ社会主義政権が誕生した 1970 年なのだ。

1970 年といえば、1968 年 4 月に大阪大学に入学した私が学生運動に熱中していた年、そして阪大近くにある千里の万博公園で大阪万博が開催された年だ。日々学生運動に明け暮れていた私が大阪万博に足を運ぶことは 1 度もなかったが、1970 年に実施されたチリの大統領選挙でのアジェンダ勝利のニュースに、私たち学生運動の仲間が大いに湧いたのは当然。それは、1971 年 4/11 に社共共闘によって黒田大阪府政が誕生した時の興奮を大きく上回る大ニュースだった。そんなアジェンダ社会主義政権はなぜ 1970 に誕生したの？

■□■パトリシオ・グスマン監督の素晴らしい実績に注目！■□■

私が『チリの闘い』3 部作（75 年、76-77 年、78-79 年）を観たのは、2016 年 12/10（『シネマ 39』54 頁）。その「みどころ」に私は、「こんなすごいドキュメンタリー映画は 2 度と生まれまいだろう。軍事力による中国本土の解放（革命）やキューバ革命は知っていても、平和的な『チリの闘い』は知らない人が多いだろうから、本作は必見！」と書いた。しかし、そんな私の予想に反して生まれたのが、その後の「弾圧 3 部作」と呼ばれている『光のノスタルジア』（10 年）、『真珠のボタン』（15 年）、『夢のアンデス』（19 年）だ。私は上記「弾圧 3 部作」の鑑賞はできなかったが、なんとパトリシオ・グスマン監督はそれに続いて、『私が思う国』（22 年）（『シネマ 57』147 頁）を監督・製作、脚本したからすごい。

同作を観た私は、当然これにてパトリシオ・グスマン監督のドキュメンタリー映画製作のお仕事は終了！そう思った。なぜなら 1973 年のピノチェット政権が指揮する軍事クーデターによって、左派はねこそぎ投獄され、3000 人が虐殺されたため、1970 年～71 年に多くの貴重なプリントはすべて失われてしまったからだ。ところが何と、半世紀に及ぶグスマン監督らの修復作業の末、ついにそれらに息が吹き込まれ、映画作家のジョナス・メカスが設立者の 1 人であるニューヨークのアンソロジー・フィルム・アーカイヴズで、2K レストア版が 2023 年 9 月に世界初上映された。その結果、クーデターで燃やされた幻の 1 作が、日本でも遂に公開されることに。本作の公開については、パトリシオ・グスマン監督のみならず、グスマン監督が撮影した幻のプリントの修復のために尽力した多くの関係者の皆さんの努力に拍手！

■□■1970 年 11 月大統領就任！さあ彼は何をやるの？■□■

チリへの植民地支配を最初に開始したのは大航海時代のスペインだが、第二次世界大戦後のチリが、戦勝国として世界一豊かになったアメリカの支配下に置かれたのは仕方ない。

しかし、1960年代のラテンアメリカでは、貧富の格差と外資依存への反発が強まり、チリでもより公正な社会を求める声広がったが、医師であり、社会主義者のアジェンデはその象徴的存在だった。そんなチリの1970年9月の大統領選挙では、アジェンデが4度目の出馬で勝利したが、その理由の一つは保守派の票が2人の候補に分裂したことだ（アジェンデ36.30%、アレックスンドリ34.98%、トミッチ27.84%）。さあ人民連合を率いて史上初の民主的選挙でマルクス主義を掲げる大統領となったアジェンデの手腕は如何に？

本作のパンフレットには、「グスマン監督による最初の年撮影時の回顧録」がある。それは「①平和的な革命 ②恐怖 ③映画 ④青年 ⑤嵐」で構成されているが、当時グスマン監督は31歳、チームの仲間たちは18歳だったというからすごい。ちなみに、2025年11/7のニューヨーク市長選挙では、トランプ大統領から「共産主義者」と呼ばれ、また、自称「民主社会主義者」で34歳の元rapperの男ゾーラン・マムダニ氏が大方の予想に反して当選したが、彼は今トランプからの各種の妨害に抵抗して、どこまで自己が掲げる政策の実現ができるのかが注目されている。それを考えても、1970年11月の大統領就任後、アジェンデが矢継ぎ早に実施した「①主要産業の国有化 ②農地改革 ③教育、医療の無償化」の改革は、まさに公約通りの最も正当な社会主義政権が目指すものだからすごい。

「グスマン監督による『最初の年』撮影時の回顧録」を読めば、この時代の“高揚感”がふつふつと伝わってくるから、これは必読！

■□■「アジェンデとチリの炎の3年とその後」も必読！■□■

アジェンデ政権が1973年9/11のピノチェット率いる軍事クーデターによって崩壊し、アジェンデ大統領も死亡。そして1973年から1990年まで、ピノチェット軍事独裁政権が続いたことは歴史上明白な事実だ。しかして、パンフレットにある「アジェンデとチリの炎の3年とその後」では、その経過が要領よくまとめられているので、これは必読！

そこで注目すべきは、そしてまた、本作でグスマン監督が大きな熱狂の中で描いているのは、1971年のヴスコビッチ経済相の拡張的金融政策によって、経済成長率が約8%も増加していった2年間のチリ人民の戦いの高揚だ。社会主義政権誕生後最初になすべき政策は、電気等の各種エネルギー、そして銅や鉄など、チリにとっての重要資源を生産するための土地や工場等の生産手段の国有化だが、それまでの資本主義社会下で資本家に私有（独占）されていたそれらの生産手段を国に奪われることになれば、資本家たちがそれに抵抗するのは当然だ。また、チリが社会主義化することを好まない、お隣の大国アメリカが彼らの抵抗を国外から支援するのも当然だ。したがって支持率36.3%からスタートしたアジェンデ社会主義政権による社会主義国家チリの建設作業が困難なことは当初から予測されたことだが、政権発足後の①主要産業の国有化②農地改革③教育、医療の無償化という基本政策の速やかな着手は、お見事！

もちろん、これは国民（チリ人民）のアジェンデ政権への強烈な支持があつてのことだが、本作を見ていると、その支持ぶり、熱狂ぶりがグスマン監督やそのチームの人々の息

遣いとともに伝わってくるので、本作ではそれをじっくり味わいたい。しかし、旧来の資本家たち（反動勢力）とそれを支援するアメリカ（帝国主義）の策動が進むのも早く、大統領就任から2年後の1972年10月のトラック運送業者による大規模ストライキたる「十月スト」以降の反撃は・・・？

■□■この記憶を忘れずに！3本のコラムも必読！■□■

多くの日本人、とりわけ大阪人は1970年といえば、大阪万博を思い出す。また、その55年後の2025年に2度目の関西万博が開催され大成功に終わった今は、その余韻に浸っているはずだ。しかし、チリの人たち（人民）にとっての1970年は、大統領選挙で初のアジェンデ社会主義政権が誕生した年として記憶に残っているものだ。それはパトリシオ・グスマン監督も同じ。そうだからこそ、彼は一旦はピノチェット軍事クーデターの中で失われ、長きにわたって封印されていたプリントを、半世紀に及ぶ修復作業の末に再び息を吹き込んだわけだ。

そんな本作の映像は当然見どころいっぱい、当時のチリ人民の高揚ぶりが伝わってくるが、パンフレットも前述したもの他、貴重なものが多い。その第1は「チリの戦い3部作」と『私が想う国』についての解説だから、これは筆読！さらに、本作の鑑賞後にじっくり味わいたいコラムが次の3本だ。

- ① 岡田秀則氏（フィルム・アーキビスト、国立映画アーカイブ主任研究員）の「映画の朋あり、遠方より来る」
- ② 伊藤千尋氏（国際ジャーナリスト（元朝日新聞特派員））の「半世紀前のチリが現代に問いかける」
- ③ 平山亜理氏（朝日新聞 元サンパウロ・ハバナ特派員）の「アジェンデが残したもの」

1970年の大阪万博が残した貴重な遺産は、2025年の関西万博開催の中で再び語られたが、1970年のアジェンデ政権が残した貴重な遺産は、まさに『最初の年』と題された貴重な本作（復活フィルム）を鑑賞する中で再び語られるべきだ。そして、そんな語り合いをするについての貴重な資料が上記3本のコラムだから、これはしっかり読み込み勉強したい。

2025（令和7）年11月19日記